

研究分野のキーワード：19世紀イギリス文学，イギリス文化，児童文学，批評理論

研究紹介

19世紀のイギリス文学、とりわけチャールズ・キングズリー（Charles Kingsley, 1819-75）の、1)初期の「社会小説」と呼ばれる『オールトン・ロック』（*Alton Locke*, 1849）や『酵母』（*Yeast*, 1848）の分析と、2)後期の児童文学作品『水の子』（*The Water Babies*, 1863）の分析を行っています。

1) は、功利主義、貧民法、公衆衛生等の文化論的視点から読み直すものです。

2) は、同著者による児童向け科学読本『グロカス』（*Glaucus; or the Wonders of the Shore*, 1855）や『どうしておばさんとなぜなぜふじん』（*Madam How and Lady Why*, 1869）等を補助線として、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）およびハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）による（社会）進化論・教育論等と英国国教会牧師でもあったキングズリーの宗教思想を絡めて読み直すものです。

キングズリー研究と平行して、児童文学における LGBT（Lesbian / Gay / Bisexual / Transgender）に関する研究も行っています。教育・啓蒙効果を備えた児童文学は伝統的に極めて保守的な文学ジャンルですが、とくに 1960 年代以降、イザベル・ホランド（Isabelle Holland, 1920-2002）『顔のない男』（*The Man Without a Face*, 1993）、レズリー・ニューマン（Leslea Newman, 1955-）の『ヘザーの二人のお母さん』（*Heather Has Two Mommies*, 1989）、ロバート・ウェストール（Robert Westall, 1929-93）『海辺の王国』（*The Kingdom by the Sea*, 1990）、ポーラ・フォックス（Paula Fox, 1923-）『イーグルカイト：ぼくの父は、エイズとたたかった』（*The Eagle Kite*, 1995）、エイダン・チェンバーズ（Aidan Chambers, 1934-）『二つの旅の終わりに』（*Postcards from No Man's Land*, 1999）など LGBT の問題を扱う児童文学が次第にその数を増やしてきました。伝統や規範に依拠することで、逆説的に転覆的なジェンダーを描くことになるのではないかという仮説をもとに、研究を進めています。